

## 江戸時代から女性をより 美しく見せる手許の小道具

### 小間物としての扱いから独立した商品へ

女性のファッションで重要な小道具となるのがハンドバッグです。江戸時代に描かれた美人画でも、巾着袋を手をしている場面がよく見られます。手許の仕草やアクセントによって、女性はより美しくなるようです。ハンドバッグを日本人が使うようになるのは明治以降になってからです。しかも当初は袋物と呼ばれ、化粧品、櫛、簪、喫煙具などと一緒に小間物として扱われていました。つまり小間物の入れ物としての意味が強かったのです。明治の終わり頃から独立した商品として流通するようになり、輸入品のハンドバッグが大正時代から広がり始めます。そして大正9年に名古屋袋物卸商組合が結成され、袋物の需要も伸びていきました。昭和になっても需要は拡大し、昭和14年には名古屋袋物商業組合、同15年には名古屋袋物製造組合が結成されました。しかし戦争の激化と共に、組合活動は停止となりました。

### いまでも残る繊細な手作業

戦後、新たな組合として名古屋袋物商業組合が結



成され、昭和31年に法律に基づき商工一体となった名古屋袋物商工協同組合が設立されました。組合員のための資金調達、高周波によるビニール同時接着裁断法の特許問題、ハンドバッグの物品税など数々の問題に対応してきました。さらに品質表示・原産国表示問題への取組や新作展示会の開催などをおこなってきました。平成10年には袋物の呼称をやめ、名古屋ハンドバッグ協同組合に名称を改めました。

ハンドバッグは実用性、機能性、丈夫さはもちろんデザイン性を重視したファッション性が求められています。材料も天然皮革、合成皮革、ナイロン、布といった素材が主体となっています。製法はデザインから紙型を起こし、それをプレス機やナイフ・ハサミでムダのないよう裁断します。縫製しやすいよう部分的に皮革材料は革すき作業、布や毛皮等は裏打ち作業をおこなってから留め金、ベルトといった附属物を取り付けます。これらの工程のうち、機械化されている部分もありますが手づくりに頼る部分も残されています。

#### DATA ■名古屋ハンドバッグ協同組合

所在地：名古屋市中区栄三丁目22番26号

- ・大正9年：名古屋袋物卸商組合を設立
- ・昭和15年：名古屋袋物製造組合を設立
- ・昭和31年：名古屋袋物商工協同組合を設立
- ・平成10年：名古屋ハンドバッグ協同組合に名称変更